

新潟県中越地震 災害復旧支援報告

公共土木施設復旧編

昨年10月23日に発生した新潟中越地震での災害復旧支援のために、県内各自治体職員が10月末から派遣されていますが、今回は公共土木施設の復旧支援のために現場で作業してきた職員の「体験記」をご紹介します。

道路復旧支援の様子

一般国道 291号線



■ 一路派遣先へ

派遣先は、長岡地域振興局地域整備部の小千谷維持管理事務所であり、ここは小千谷市と川口町の1市1町を管理する機関。

新潟県庁からは、高速道を利用し東京方面へ約1時間半を要した。地場産業は、錦鯉と小千谷そば、ちぢみ織りであり、今回の地震で特に錦鯉の棚池が壊滅的な被害を受けていた。

途中、給油のため国道沿いのガソリンスタンドに立寄り、店員より聞いたところ、地震により客の入り込みが増えたとのこと。家屋が倒壊したことにより、車内での生活によるものか。また、車用品店では、カーナビが多数売れているとのこと。

■ 復旧支援の始まり

派遣先の建物は、3階建ての合同庁舎内にあり、配属先となる小千谷維持管理事務所は2階の一室にあった。早々、同所の災害復旧課長へ挨拶し、執務室となる会議室へと案内された。

部屋の広さは、振興局で言うと第3会議室位の広さがあり、ここへテーブルで4つの島を作り、それぞれの島に2自治体の8名が配置された。1人あたりの占有面積は0.5m×0.6m程度であり、とても狭い環境での作業となった。

支援業務は、管内の公共土木施設である道路、橋梁、トンネル、河川、砂防、急傾斜の被災状況を調査することにより、復旧費の算出を行い事務所へ報告するものであった。

一般県道 小千谷川口大和線



■ 地獄絵への様相

分担は、管内を8自治体に区域割りされ、岩手県は川口町の一部を任された。この町は、地震発生後の停電により震度が不明となっていたが、その後の復旧により震度7が記録されていた所。

担当する区域は、道路8本、河川10本があり、いずれも地震により壊滅的な被害を受けた山古志村と隣接しており、相当の被害が予想された。

早々、現場に行くための準備をし始めたが、事務所から渡された資料は管内図(5万分の1)と分担が示された表一枚のみで現場案内はなし。

事務所から、川口町までは約15kmあったが、信濃川沿いの国道17号は応急復旧工事のため大渋滞している。いたる所で道路が決壊、鉄道の盛土が流れ線路は宙吊り状態、やっと約1時間かけて川口町役場へ着いたところ、庁舎前の駐車場は、復旧支援の県外車で満杯状態。近くを見わたすと民家や商店は、1階が押し潰され2階だけが残っていた。道路のマンホールは液状化現象により隆起し、アスファルト面には多数の亀裂が発生。

昼時でもあったことから、被災した住民は露天で配給による食事を採っていた。これらを目のあたりにし、まるで地獄絵の様であり持参したカメラの使用をためらった。住民の方と、話してみると行政への不満などは聞かれず、あきらめムードが感じられた。駐車場の一角では、群馬県から来たNPO法人(女性2人)が被災住民の方々に対し散髪のサービスをしていたのが印象的だった。



一般県道 茂沢竜光線

路盤中央に幅 25cm 程度で縦断方向に亀裂が発生。50m 付近の側道が、本線との分岐から谷側へ崩落。本線より 30m 先で土砂崩落により通行不能。



一般県道 小千谷川口大和線

大規模な土砂崩落により、路盤などの明かり区間の状況の変化は確認不能。土砂崩落した斜面の頂上付近から水が流れている。



一般県道 小千谷川口大和線

坑口付近の谷側の側道に路盤縦断方向の多数の亀裂発生。地山・路盤が崩落。ガードレールが傾いている。

■公共土木施設の被害

担当する道路や河川などの調査は、山間の集落まで入り込む必要からパジェロは機動力を発揮した。乗用車ではとても通れない様な道路の段差や亀裂などもスイスイ進み、初めてこの車の有難みを感じた。被災した道路は、路面に亀の子状に亀裂が入った場所やブロック塀の倒壊、大きな地すべりで何処が道路か分からない所。また、橋の下部工に亀裂が入り鉄筋が露出、トンネルの内壁に水平方向の亀裂が入りコンクリート片が落ちている所など、このかた土木の仕事について小職として稀に見る体験であった。

これらの被災状況を持参した図面に記載し、長さや断面を巻尺で測定、黒板を使用しデジカメで撮影する作業を繰り返し続け奥へと進んだ。とりわけ、木沢川の被災調査では途中山間の道路が地すべりにより寸断、河川は天然ダムの様相。危険を冒してまでの調査は困難と判断し、事務所へ連絡（携帯）のうえ作業を断念した。

帰庁後、状況を再度報告し今後の対応を聞いたところ、空からによる被災調査に振替えるとのことであった。

■戦場の様な会議室

日中の被災調査の後、夜間は調査した結果を図化する作業と合わせ復旧工法の検討、復旧費の算出となった。岩手県と同様、各自治体も夕方には受持った区域の被災調査を終え、内業を進めている。これと併行し、測量会社から提出されてくる図面を見ながら自治体と測量会社とのやり取りで、狭い会議室内はさながら戦場と化している。

また、現在の進行状況を派遣元の県へ電話する方や、設計・積算に関し疑問点を討論するグループなどもあり、相当の集中力を持っていないと自分の仕事が進まない職場環境であった。

■3人よれば文殊の知恵

岩手県は、小職の他3名の若手職員が業務をこなした。測量会社からの図面の提出がなされると、若手職員らはまるで仕事を取り合うかの様な積極性で図面に計画線を入れ、復旧費を算出し災害査定設計書の作成を進めている。作業の途中段階では、必要に応じ災害復旧課の職員と相談のうえ指示を仰ぎながら取りまとめていた。

また、計画段階において個人で悩んでいるかと思うと、いつの間にか3人の仲で話し合い、自らまとめていく様子を見て頼もしさを感じた。小職はもっぱら、業務の進行管理や派遣元との連絡、復旧工法に関する国と市町村、JRとの協議に終始した。

■感想と日常業務への反映

中越地震による犠牲者の多くは、建物倒壊や土砂崩れが原因であった。また、道路の寸断により、各地に孤立集落が発生した他ライフラインの復旧に大きな支障をきたした。高速道路や新幹線など高速交通の寸断により、首都圏とも交通途絶が生じたことは、観光産業にも大きな後遺症を残した。

我が家で囲らんすることも叶えず、見えない将来への不安、家屋や農地そして職を失った住民に対しての公的な支援が早急に必要なこと。一方では、被災住民の精神的なショックを癒すことの大切さなど、今回の派遣により地震などの有事に対し日頃の備えがいかに大切かということが分かりました。

巷では、この先30年以内に99%の確立で「宮城県沖地震」が発生すると言われてはいますが、今回の貴重な体験を生かし危機管理の体制づくりに寄与して行きたいと考えています。

宮古地方振興局土木部佐藤秀一